

石崎陽一先生

東京都立日比谷高等学校 主任教諭

Yoichi
ISHIZAKI



コミュニケーションを支えるための 英文法指導のデザインとは

日本の英語教育がコミュニケーション重視へ方針転換してからこれまで、文法的志向は遠ざけられつつありました。しかし、石崎陽一先生（東京都立日比谷高等学校 主任教諭）は英文法こそが英語4技能の下支えとなり、日本人の英語コミュニケーション能力を伸ばすものと主張します。高大接続改革を控える今、これまで以上に必要性が増す「コミュニケーション型指導」を考えるにあたり、高校における「英語表現」の授業はどう組み立てればよいのでしょうか。中でも、英文法指導をいかにデザインしていくべきなのか、その具体的な指導方法を伺います。

取材_小宮可子 撮影_羽切利夫

体系的な法則に気付き 英語を身に付けた体験

生徒にも話すのですが、私は中学2年生まで大の英語嫌いでした。授業は聞かず家庭学習など当然しませんから、単語テストでも0点ばかり取っていました。たまたま1点を取ったときの正答はgameの1語のみ。当時、悪友らとゲームセンターに入り浸っていましたからね。それが今や、英文法書や語学書を片手にお酒を飲むのが至福のひとつという、自他ともに認める英語愛好家です（笑）。

転機になったのは中学3年生の春のことでした。新しい先生が英語の担当になり、初回の授業で「英語も日本語と同じ『言葉』だから、学ぶと面白いよ」などと語り始めました。そして、「英語や数学は積み上げの教科だから、自分には今さらもう無理だと思っている人はいない？でもね、積み上げの教科だからこそ、分からないところに戻っていつでもやり直せるのよ。そして、素直な人こそ伸びるのよ」と。当時の級友は誰も覚えていないようですが、私にはこの話が響いたんです。当時、貧しかった私は、夏休みに従兄弟から中学1年生用と中学2年生用の問題集を譲ってもらい、記入済みの答えを消すことから学習を始めました。

その時の私はというと、アルファベットのL、M、N辺りの並びを言うのも怪しいレベル。夏休みいっぱいかけてなんとかその2冊をやり遂げたものの、それはもう、本当にきつかった。「今は英語の土台を作っている時期だから、大変だけど固

くしっかりと土台を作らないといけないのよ」という先生の言葉だけが励みでした。遠距離通学をしていたので、先生に気軽に質問にも行けません。塾などにも通えませんし、相談できる人も周りにいない。文字通りの独学状態でした。

先生は英語学習の心得の一つとして「習ったことを忘れない」という言葉を示してくれていました。でも、丸暗記ではすぐに忘れてしまう。そこで私は、英語という言葉の「規則性」を探し始めました。手探りででしたが、気付いたら新出の文法事項全てに、見つけた規則性を当てはめ、体系付けて整理するようになっていました。休み明け、授業がよく理解できたのを覚えています。

さらに、高校でもこのような整理を続けていたところ、関係副詞が出てきた時も、関係代名詞との関連で腑に落ちまし

たし、分詞構文も「要するにing形の副詞的用法なんだ」と捉えて自分のものになってきた感じがしました。

「高校の英語は中学の英語の延長線上にあるのよ」という先生の言葉は本当でした。理屈を大事にする。全体を体系的に学ぶ。そうすることで、英語で正しく理解・発信するための「魔法のツール」を手にした気分になりました。

英語教育改革の流れの中で 不遇の時代が続く英文法

しかし、昭和53年告示の学習指導要領に合わせて高校の英文法の検定教科書が廃止されて以降、英文法は表舞台から去り、日陰者扱いされてきました。代わりに「コミュニケーション」という言葉がもてはやされ、「聞く」「話す」スキルを伸



石崎先生は「科目で分け隔てせずどの場面でも英文法を意識させるべき」と話す

ばすための教授法が注目を集めます。「文法を知らなくとも英語は通じる」「実際に話すときに文法なんて考えていたら英語が口から出てこない」「外国人とたくさん話すことが上達の鍵」など、英文法不要論は根強いです。確かに文法訳読に偏った授業に改善点があったことは事実です。しかし、「英語教育改革」の名の下に切り捨てられた英文法がふびんでなりません。私にとって英文法は、新しい世界を覗かせてくれた「恩人」だからです。

「不易と流行」という言葉がありますが、教育でも温故知新の精神を持つことは大切です。新しきを採用し古きものを切り捨てるのではなく、新旧の良いところを融合させる改革こそ理想ではないでしょうか。英語を学ぶ上で文法的発想(グラマティカル・マインド)が必要であることは「不易」、つまり、時代を経ても変わらない事実だと考えます。形容詞の概念を心得ているからこそ、ing形の形容詞的用法、すなわち分詞の使い方が理解で

きる。こうした積み上げで学習は深まっていくのです。

確かに、重箱の隅をつつくような文法知識の伝授は有害ではありますが、標準英語の運用法としての伝統的文法学習は、古今を問わず英語学習者が避けては通れない道です。また、英文法の基本が分かっているならば、他のヨーロッパの言語にも応用することができます。英文法の習得は第二、第三の外国語を学ぶためにもとても有効です。

文法指導を通じて表現する力を身に付けさせる

では一方の「流行」、つまり時代の変化とともに変えていく必要があるものにはどんなものがあるのでしょうか。三つのプロセスに分けて順にお話しします。

【1. ゴール設定を変える】

文法指導を敬遠する先生にその理由を

尋ねた際、「英文法は4技能の中に含まれないですから」という答えが返ってきました。確かに、現行の学習指導要領では、中高を通じてコミュニケーション能力を育成し、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能をバランス良く育成することが目指されており、現在進められている大学入試改革においても、4技能の総合的評価を行うことが課題になっています。しかし、英文法は一見すると4技能とは無関係のように思えるかもしれませんが、その4技能を下支えする重要な存在です。

いかにテストや検定試験などで英文法や語法のセクションの点数が高くても、それだけでは文法の力があるとは言えないと思います。英文法は英語で正しく読み、書き、話し、聞くための技術です。学んだ英文法を使って相手のことを理解できる、自らの気持ちや考えを表現できる。それでこそ文法力があると評価できるのではないのでしょうか。「理解と発信のためのツールとして英文法を学び、運用していくこと」。これこそが、コミュニケーション重視の時代における文法指導のゴールであるはずで

【2. 教師の意識を変える】

最近、非常勤で教える上智大学の教職課程の学生たちに、高校時代にどんな文法指導を受けたか聞いてみました。すると驚いたことに、米国で3年間過ごした1名を除いた全員が次のような授業の経験者だったのです。見開き1ページで1単元、左ページを例文と簡単な解説が占め、右ページに語句選択、空所補充、語句整序、作文の問題が数題ずつ付いている教材を使い、予習で問題を解き、授業ではその答え合わせに終始する……。

文法指導の方法が昔から何も変わっていないことに驚きました。現在、多くの高校が「英語表現」の授業の中で文法指導を行っていると思いますが、「表現」の授業でありながら、従来型の指導が行われているのが実状で、全国の多くの先生が文法「を」教えるという発想から抜け出せずにいるのです。

問題演習は主として理解度の確認のた

めにの行うものなのに、それに終始してしまうケースがとても多い。いわば英文法の「理解」がゴールになってしまっている。文法を学んだ「その先」を見据えて指導することが肝要であって、まずは教師が「文法は理解と発信のためのツール」であることを意識し、指導の方法を考える必要があると強く感じています。

【3. 生徒の意識を変える】

教師の意識が変われば、授業が変わり、自ずと生徒の意識も変わってくると思います。英文法とコミュニケーションを切り離して考え(させ)ないことが大切ではないでしょうか。生徒の発話を促そうとして、われわれ教師は『コミュニケーション英語』の授業では英文法は気にしないでいいよ』などと言ってしまいがちですが、「英語表現」だから、「コミュニケーション英語」だからと、科目の垣根を作らずに、どの場面でも英文法を意識させるように仕向けるべきです。

また、私は「文法はパソコンのマニュアルのようなものだよ」と生徒に話しています。新しいパソコンを使うのに、最初にマニュアルを熟読する人はいません。まずはパソコンを使ってみて「あれ、これをするにはどうすればいいのかな?」と、疑問が湧くたびにマニュアルを開いて解決していくはずで

アウトプットのための英文法指導事例

では、私は「英語表現」の授業で具体的に何をやっているか。少しご紹介させていただきます。発信をゴールに据えた設計は「コミュニケーション英語」の授業と同じですが、「英語表現」の授業では文法項目の学習手段の一つとして英作文を位置付け、ゴールにしています。

大まかには、それぞれの単元につき、

①学習ポイントの説明、②段階式ドリルを使っての学習ポイントの確認、③作文、という流れで進めます。段階式ドリルは語形変化、和訳、誤文訂正、並べ替え、部分英訳という、易から難に配列した設問形式別の段階をいくつも経て、最後の英作文に至る構成にしています。このように、段階式ドリルに取り組む過程で、用例・用法・使用場面の具体的なイメージに繰り返し触れ、比較・対照、理由付けといったプロセスを踏み、英語という言葉の「規則性」を身に付けることができるのです。

生徒が実際に文法項目の知識を使う際、初めはつまづきます。そこで、つまづいたポイントをすぐその場で確認させます。そして、同じ項目に別の問題形式で繰り返し触れさせながら運用力を付けていくわけ

です。なお、学んだ英文法の知識を発信時、特に「話す」場面で生かすには、「考えれば分かる」というレベルではなく、「すぐに使える」というレベルにまで到達させる必要があります。そこで、いまお話ししたような工夫に加え、①の段階では、音声面の指導も行っています。ターゲットとなる文法事項を含む例文を繰り返し音読させるのです。このとき、必要に応じて発音指導や発音矯正を行うこともあります。これは「話す」という発信のゴールを最初から意識させるという目的もありますが、十分に口頭練習を積んでいないと、いざ「話す」となったときに口から英語が出るまでに時間を要してしまい、結果として、何も発言できずに終わることがあるから

です。これは私自身の苦い経験でもあります。こうした発想と工夫に基づいて木村達哉先生(灘中学校・高等学校 教諭)と一緒に作ったのが『夢をかなえる英文法 ユメブン』

です。おかげさまで大変好評で、2011年に上梓して以来、多くの学校で使っていただいています。先生方の中には、一般的な文法書と比べて扱う文法項目が多くないので不安だという方もいらっしゃる

4技能評価を追い風に英文法教育復権を目指す

です。さて、中学3年生の夏から、冒頭の恩師の言葉を信じて英語学習を続けた私ですが、英語教師になって17年目になります。英文法のおかげで今の自分がある。だから、コミュニケーション重視の流れの中で長く虐げられてきた英文法に、何とか「恩返し」がしたいと考えています。

4技能の育成・評価が課題となっている今、その下支えとなる英文法にとっては追い風が吹いていると言えます。グローバル時代のコミュニケーション・ツールとして英語、そして英文法が果たす役割を今一度見直し、次代の英語教育のブランドデザインを提案していきたいと思

います。ところで、「積み上げの教科は、分らないところに戻っていつでもやり直せる」という恩師の言葉を受け、「同じ積み上げ式ならば数学も大丈夫だろう」と学生時代に数学にも挑戦しましたが……。残念ながら英語ほどは縁がなかったようです(笑)。



石崎陽一先生(東京都立日比谷高等学校 主任教諭)

東京都出身。新聞配達をして上智大学に通い渡部昇一氏に師事。専門はイギリスの英文学史(18世紀)。文法理論の発達、文法学習の功罪、文法の社会的役割などに主な関心がある。研究者を目指すのが、都立高校で英語を教える初志を貫徹。下町の進路多様校、島嶼勤務、多摩地区の進学指導重点校を経て現職。2015年秋より上智大学講師を兼任。著書に『夢をかなえる英文法 ユメブン① 高校修了～大学入試レベル』(共著、アルク)がある。文部科学省検定教科書(コミュニケーション英語)の編集委員を務めるほか、2014年よりNHKラジオテキストにて英文法の連載コラムを執筆中。『英語教育』(大修館書店)をはじめ、専門誌への寄稿も多数。ブログ「アーリーバードの収穫」(<http://isyoichi.seesaa.net>)

英文法をベースに英語4技能をバランス良く鍛える

運用レベルにまで引き上げるべき文法事項を暗唱例文に凝縮。英語4技能とコミュニケーション力豊かな英語力を鍛えるバリエーション豊かなタスクにより、読解からスピーキングまであらゆる活動に生きる「使える」英文法力を身に付けることができる1冊。

『夢をかなえる英文法 ユメブン① 高校修了～大学入試レベル』(アルク)